

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ				薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)			
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
血行促進成分	酢酸トコフェロール	外用しないので、ユベラ錠		微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。膜安定化作用あり。			0.1～5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)							錠剤通常、成人には1回1～2錠(酢酸トコフェロールとして、50～100mg)を、1日2～3回経口投与する。 ①年齢・症状により適量調整する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行、動脈硬化)
	トウガラシ	トウガラシチンキを使用					頻度不明(刺激感、疼痛)			び爛、創傷皮膚及び粘膜			原液で使用しない、入浴直後の使用は避ける。眼又は眼の周囲に使用しない。		①通常、トウガラシチンキとして、10～40%を添加した液剤、軟膏剤、硬膏剤又はハップ剤を1日1～数回局所に塗布する。 ②通常、トウガラシチンキ	皮膚刺激剤として下記に用いる。 ①筋肉痛、凍瘡、凍傷(第1度)
	ニコチン酸ベンジル	なし														
角質軟化・皮膚保護成分	オリブ油	皮膚保護・軟膏基剤として														
	グリセリン	調剤用薬として														
	ビタミンA	ザーネ軟膏	モルモットの実験的角化症に対する実験において、表皮の新陳代謝を高め、ケラチン形成を抑制することにより過角化症に効果を発揮することが認められている。				0.1～5%未満(紅斑、そう痒)、0.1%未満(発疹)				・皮膚刺激に対する感受性が亢進している患者 ・妊婦または妊娠の可能性のある者		本剤は眼には使用しないこと。		1日2～3回患部に塗布する	角化性皮膚疾患(尋常性魚鱗癬、毛孔性苔癬、単純性靴癬疹)
ワセリン	黄色ワセリン	局方から黄色であるほか、白色ワセリンと同じ規格である。				頻度不明(接触皮膚炎)										軟膏基剤として調剤に用いる。また、皮膚保護剤として用いる。

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化								
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの			
	白色ワセリン(局方から)プロベト	局方から・中 性で、刺激性 がほとんどな く寒暖により、 粘稠度があまり 変わらず、 植物性又は 動物性油脂 のように光、 湿気によって 酸敗すること が少ない安定 な優れた軟膏 基材である。 ・白色ワセリン は黄色ワセ リンをさらに 脱色したもので 本質的に相 違はない。				プロベト：頻 度不明(接触 皮膚炎)							プロベト：眼科 用軟膏基剤、 一般軟膏基剤 として膜剤に 用いる。また、 皮膚保護剤と して用いる。 白色ワセリン： 軟膏基材とし て用いる。また 皮膚保護剤と して用いる。 下界との接触 及び水分の蒸 散を遮断でき るため、創傷 面及び肉が面 の保護や手足 のひび、あか ぎれにそのま ま薄く塗布す る。				
鎮 痒 成 分	塩酸ジフェン ヒドラミン	外用はなし ジフェンヒド ラミンはあり ーレスタミン コーワ軟膏	アレルギーを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、腫疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。			頻度不明(過 敏症)					炎症症状が 強い渗出性 の皮膚炎：適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。		使用部位：眼の まわりに使用 しない。		通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	尋麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ	

しもやけ・あかぎれ用薬

製品群No. 55

ワークシートNo.35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ				薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)				症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
抗炎症成分	グリチルレチン酸	テルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)							眼科用として使用しない		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
			併用禁忌(他 剤との併用により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
抗 菌 成 分 ( サル ファ 剤)	スルファメ トキサゾール	外用がない ので類薬の スルフィンキ サゾール点 眼(サイアジ ン)で代用	抗菌作用(グ ラム陽性菌、 陰性菌)に広く 作用。抗菌力 はスルファチ アゾール、ス ルファジアジ ンとほぼ等し い。				頻度不明(刺 激感、眼瞼縁 の発赤、結膜 充血)	頻度不明(過 敏症)		サルファ剤過敏症 既往歴	薬物過敏症				まれに全身 使用と同じ副 作用があら われることが あるので、長 期連用は避 ける事。			
	スルフィンソ ミジン	医療用医薬 品としてなし																
	スルファジア ジン	テラジアバ スタ	スルファジア ジンは、皮膚 の細菌感染 の原因となる ブドウ球菌 (MIC:3μ g/mL)、大腸 菌(MIC:3μ g/mL)等に抗 菌力を示す。				頻度不明(菌 交代現象、そ の他:内服、 注射等全身 投与の場合 と同様な副作 用)	頻度不明(過 敏症)		サルファ剤過敏症 の既往歴	薬物過敏症の既 往歴 ・光線過敏症の既 往歴 ・エリテマトーデス	・疾病の治療 上必要な最 小限の期間 の投与にとど めること。(耐 性菌の発現 等を防ぐた め)		眼科用として使 用しないこと。	・長期使用は 避けること (内服、注射 等全身投与 の場合と同 様な副作用 発現)。		通常、症状により適量を1 日1~数回直接患部に塗 布または無菌ガーゼにの ばして貼付する。	適応菌種 本剤に感性の ブドウ球菌属、 大腸菌 適応症 表在性皮膚感 染症、深在性 皮膚感染症、 外傷・熱傷およ び手術創等の 二次感染、び らん・潰瘍の二 次感染
ホモスルファ ミン	配合剤のみ																	

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(服用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(服用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用:細胞間基質を溶解し鱗屑の剝離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。防腐作用:微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。				頻度不明(発赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身の投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	患部が化膿しているなど湿潤、ひ癩が著しい場合は、あらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合:副作用があらわれやすいので注意して使用。 眼下部には使用しないこと。	長期・大量使用で内服、注射等全身の投与の場合と同様な副作用発現のおそれ。 長期間使用しても症状の改善が認められない場合:改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。	1.通常サリチル酸として、5~10%の絆創膏を用い、2~5日目ごとに取りかえる。 2.次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1~2回塗布または散布する。小児:サリチル酸として0.1~3%、成人:サリチル酸として2~10%	1.発赤・腫脹・角質剝離。 2.乾癬、白癬(頭部浅在性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、癬風、紅色粒糠疹、紅色陰癬、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手掌足底角化症(皸)、ダリエー病、遠山環状状粒糠疹)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌跖膿疱症、ヘブラ粒糠疹、アトピー性皮膚炎、ざ瘡、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果					
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき 副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ							
殺菌成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ピピテン液					ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)			・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経)に対して直接使用した場合は、聴覚、神経障害を来すことがある。 ・膈、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている) ・産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼											本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (C 5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (C 0.5%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (C 0.5%水溶液)
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒドラミンはあり ーレスタミン コーワ軟膏						頻度不明(過敏症)										通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。 毒蕁麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ				

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

7-シートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	E 濫用のおそれ	F 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	G 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	H 使用方法(誤使用のおそれ)	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果								
		薬理作用	相互作用										重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用に より重大な問題 が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるおそ れ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
殺菌成分	イオウ	日本薬局方イオウ	イオウは皮膚表面でも徐々に硫化水素やポリチオン酸特ニベンチチオンとなり抗菌作用を現すので、寄生性皮膚疾患に奏効する。また皮膚角化に関係があるといわれる-SH基をS-Sに変えることにより角質軟化作用を有す。																通常、3～10%の軟膏、懸濁液又はローションとして1日1～2回適量を患部に塗布する。	疥癬、汗疱状白癬、小水泡性斑状白癬、頭癬、頭部浅在性白癬、黄癬、乾癬、ざ瘡、脂漏、慢性湿疹
	イソプロピルメチルフェノール	フェノールを使用	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。																効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5～2%溶液を用いる。(50～67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2～5%溶液を用いる。(20～50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3～5%溶液を用いる。(20～33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1～2%溶液を用いる。(50～100倍) 軟膏:フェノールとして2～5%軟膏を用いる。(20～50倍)	

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
	エタノール	消毒用エタノール<ヤクハン>	本剤は、使用濃度において栄養型細菌(グラム陽性菌、グラム陰性菌、酵母菌、ウイルス等)には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷菌等)及び一部のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。エタノールの殺菌力上の最適濃度については、その試験方法により一定しないが、通常70%と称してよく、この濃度においては皮膚に対して拡散及び揮発性も適度で、表皮を損傷することもなく、無害である。								・経口投与しないこと ・過量投与:全身の熱感、味覚・嗅覚機能の低下、顔面紅潮、発汗、悪心、嘔吐、急性胃炎、マロリーワイス症候群、口渇、利尿、痛覚閾値の上昇、呼吸促進、心悸亢進、血圧下降、多幸感、酩酊、身体失調、歩行困難、急性アルコール性ミオパチー、記憶障害、感情不安定、代謝性アシドーシス、低血糖、体温低下、脱水、失禁、肝機能障害、呼吸抑制、昏睡(エタノールの血中濃度が0.4~0.5%で呼吸停止が起こる)、催眠剤との同時服用や頭部外傷の合併にも注意する。		・同一部位に反復使用する場合には、脱脂等による皮膚荒れを認めることがある ・広範囲又は長期間使用した場合には、蒸気の吸入に注意する	本品をそのまま消毒部位に塗布する。	手術・皮膚の消毒 手術部位(手術野)の皮膚の消毒 医療用具の消毒
殺菌成分	レゾルシン	レゾルシン「純生」	レゾルシンは、石炭酸と同く殺菌作用があるが、作用の強さは石炭酸の1/3である。局所的にタンパク凝固作用を有し、また角質溶解作用も有する。			・頻度不明(頻脈等、胃腸障害:悪心等、めまい、痺れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等)・長期連用・大量使用:経皮吸収によりこのような中毒症状があらわれることがある ・頻度不明(真菌性・細菌性感染症)					・眼及び眼の周囲には使用しないこと。 ・皮膚が徐々に化膿するよう使用回数制限すること。 ・毛髪に使用する際は、毛髪の石けん分を洗い落とししてから使用すること。	・長期連用・大量使用:経皮吸収により、頻脈等、胃腸障害:悪心等、めまい、痺れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等の中毒症状があらわれることがある	2~5%の軟膏、水溶液又はローションとして、適量を1日1~2回塗布する。	殺菌、鎮痒、表皮はく離、角質溶解剤として、次の疾患に用いる。 脂漏、脂漏性湿疹、被髪部乾癬、尋常性ざ瘡、粒状性脱毛症	



化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
	イブプロフェンピコノール	ベシカム軟膏・クリーム					3%未満(接触皮膚炎:発疹、腫脹、刺激感、そう痒、水疱・糜爛、熱感、鱗屑等) 0.1%未満(その他の皮膚症状:症状の悪化、腫疱、つっぱり感、皮膚乾燥)	過敏症		本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者	高齢者			眼科用として角膜、結膜に使用しないこと。 ・クリーム剤では、石鹸で洗顔後使用し、腫疱の多発した重症例には他の適切な治療を行うことが望ましい。		①軟膏及びクリーム:本品の適量を1日数回患部に塗布する。 ②軟膏及びクリーム:本品の適量を1日1~2回患部に貼布する。 ③クリーム:本品の適量を1日数回石鹸で洗顔後、患部に塗布する。	①軟膏及びクリーム:急性湿疹、接触皮膚炎、アトピー皮膚炎、慢性湿疹、酒さ様皮膚炎、口囲皮膚炎 ②軟膏及びクリーム:帯状疱疹 ③クリーム:尋常性ざ瘡
	グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏						5%以上又は頻度不明(過敏症)					眼科用として使用しない			通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎
※殺菌成分、角質軟化成分	イオウ	日本薬局方イオウ					頻度不明(皮膚炎等)、頻度不明(長期・大量使用又は高濃度の使用で皮膚炎)	頻度不明(過敏症状)		本剤に対し過敏症の既往歴のある患者(症状悪化)		患部が化膿しているなど湿疹、びらんが著しい場合には、あらかじめ適切な処置を行った後使用すること。		眼には使用しないこと。 ・長期・大量使用又は高濃度の使用で皮膚炎 ・長期間使用しても症状の改善が認められない場合には、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		通常、3~10%の軟膏、懸濁液又はローションとして1日1~2回適量を患部に塗布する。	疥癬、汗疱状白癬、小水疱性斑状白癬、頑癬、頭部浅在性白癬、黄癬、乾癬、ざ瘡、脂漏、慢性湿疹

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
※角質軟化成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用。細胞間基質を溶解し鱗屑の剥離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。防腐作用。微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。				頻度不明(発赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身的投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)			本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	患部が化膿しているなど溼潤、び爛が著しい場合はあらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合：副作用があらわれやすいので注意して使用。眼・下用には使用しないこと。	長期・大量使用で内服、注射等全身的投与の場合と同様な副作用発現のおそれ。長期使用しても症状の改善が認められない場合は、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい		1.通常サリチル酸として、50%の絆創膏を用い、2～5日目ごとに取りかえる。2.次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1～2回塗布または散布する。小児：サリチル酸として0.1～3%、成人：サリチル酸として2～10%	1.疣贅・贅腫・疥癬腫の角質剥離。 2.乾癬、白癬(頭部浅在性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、癬風、紅色粒粒疹、紅色陰癬、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手掌足底角化症(腫)、ダリエー病、遠山連環状粒粒疹)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌蹠膿疱症、アトピー性皮膚炎、ざ瘡、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患
※殺菌成分、角質軟化成分	レゾルシン	レゾルシン「純生」	レゾルシンは、石炭酸と同じ殺菌作用があるが、作用の強さは石炭酸の1/3である。局所的にタンパク凝固作用を有し、また角質溶解作用も有する。				頻度不明(頻脈等、胃腸障害、悪心等、めまい、痙攣等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等-長期連用・大量使用、経皮吸収によりこのような中毒症状があらわれることがある) 頻度不明(真菌性・細菌性感染症)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴のある患者 ・皮膚結核、真菌性皮膚疾患、単純性疱疹、種痘疹、水痘の患者(症状悪化) ・乳幼児(経皮吸収による副作用発現)				眼及び目の周囲には使用しないこと。 ・皮膚が徐々にはく離するよう使用回数を制限すること。 ・毛髪に使用する際は、毛髪の石けん分を洗い落とすこと。	長期連用・大量使用：経皮吸収により、頻脈等、胃腸障害、悪心等、めまい、痙攣等、メヘモグロビン血症、粘液水腫等の中毒症状があらわれることがある		2～5%の軟膏、水溶液又はコーションとして、適量を1日1～2回塗布する。	殺菌、鎮痒、表皮はく離。角質溶解剤として、次の疾患に用いる。 脂漏、脂漏性湿疹、被髪部乾癬、尋常性ざ瘡、粒粒性脱毛症	

※ にきび治療薬